



第11回

丹波育児院

~辻原光治とその周辺の人々~

明田吉五郎・重次郎兄弟

今回は、これまでに何度か名前が出てきた明田吉五郎・重次郎兄弟について見ていきます。

兄吉五郎は、初代須知村長ほか多数の公職に就いて活躍した人物ですが、丹波教会の主任執事も勤めましたから辻原光治とは教会を通じて交流がありました。

また、弟重次郎も同じく信徒であり、長らく船井郡蚕糸業組合長を勤めましたから辻原とは職場で上司・部下の関係でもありました。

代官の家系、祖父三太夫

明田家は、曾根村(京丹波町)で代々旗本川勝氏の代官を勤めた家でした。川勝氏は丹波に二千五百石を有し、氷上郡中山(丹波市春日町)に陣屋があり、曾根にも中上に代官所を置いていました。場所は現在の府道松山須知線のバス停「曾根」近くで、二反七畝の屋敷に堀のある豪儀な建物が建っていました。現在は民家藤川氏になっています。明田家はここへ天正年間(一五七三〜九二)に来住したとい



明田吉五郎(1856~1917)

ます。祖父三太夫(一八〇八〜八〇)は「頭脳明敏、博識多彩の人にて智者と呼ばれたる偉人にて、村民を憐れみ頗る任侠に富み、公共の為に尽瘁」しました(以下、引用は『現代船井郡人物史』)。

三太夫の時が明田家の全盛で、奉公人二十余人を使

政三年(一八五六)七月二十一日に誕生しました。放蕩・信仰・禁酒運動 吉五郎は、年少期から父の代わりに祖父の代理を勤めていましたが、明治二二年に父が死に、翌年祖父が死んで家督を継ぐと、金が自由になり遊蕩にふけりました。一時は京都の芸者を身請けして園部に困っていたこともあったとい

祖父三太夫(一八〇八〜八〇)は「頭脳明敏、博識多彩の人にて智者と呼ばれたる偉人にて、村民を憐れみ頗る任侠に富み、公共の為に尽瘁」しました(以下、引用は『現代船井郡人物史』)。

三太夫の時が明田家の全盛で、奉公人二十余人を使

政治参加が資産家層に限られていた時代には、政治は名譽職で、政治で生計を立てることは賤しまれました。政治に奔走して家産を失い残るは井戸と堀だけというのを「井戸堀政治家」といいますが、吉五郎もそんな一人だったのでしようか。吉五郎を讃えて須知町が昭和天皇の「大典之秋」(昭和三年)に建立した記念碑が須知町役場跡にいまも佇んでいます(左写真)。

村政に尽力、のち転出

明治十年代に自由民権運動に加わっていたことは前回述べました。洗礼を受けたときは須知村外八ヶ村連合戸長役場の戸長でした。そして二二年(一八八八)、町村制が実施され須知村が誕生すると三二歳で初代村長に就任し、三一年まで三期勤めました。

村長としては特に勸業と教育に尽力しています。

養蚕に着目し株式組織の養蚕館を建設、須知養蚕事務所を設け伝習生の教育、桑園の開拓、機械製糸の導入などを実行しました。灌

漑用溜池を築造し、試作田で米・麦の良種を育てて村民に配布するなど農事改良にも努め、林業では苗圃を造って杉・松・樺を植林して村財産を造成しました。その他、道路橋梁の補修改築、役場の村中央への新築、小学校改築(二四年)、組合立高等小学校の須知への招致(二五年)、伝染病予防避病舎設置(二四年)、貧困家庭への学資金制度制定なども実施しました。

この間、農会長、郡会議員、府会議員、徴兵参事員などを次々と兼任し、「その手腕の發揮と共に名声大いに揚がりました」。

しかし、三一年十月、一切の公職を辞し、福井県農林学校首席書記に転職します。理由は「家事都合」でした。

教会主任執事として

吉五郎は、母うさ、妻つる、妹ともを信仰に導き、自ら綾部方面へ布教に行くなど信仰にも熱意を示しました。前田英吉が二二年に大阪へ去った後の主任執事に選ばれ、二九年三月まで就任しました。留岡幸助・松井文弥両牧師の下で教会運営に手腕をふるい、教会を綾部・福知山方面へまで発展させました(二六年、福知山に丹波第二教会設立)。

この時期には須知が丹波教会の中心的存在となり、二三年からは毎年須知会堂で教会の総会が開かれるようになりました。

しかし、公職から身を引いた吉五郎は、教会からも遠ざかりました。辻原光治が周旋委員として活躍した三二年三月の一週間連続祈

大阪郊外で晩年

吉五郎は、さらに「転じて農商務省に入り、兵庫農會幹事となり、加古郡別府港なる多木人造肥料所」に入り、晩年は「大阪市外歌島村野里(西淀川区)で日本人造農場の跡を引受け田園生活の多趣味を愛し風月を友」として暮らし、大正六年(一九一七)四月、同地で逝去しました。六一歳でした。

吉五郎が公職を辞さねばならなかった「家事都合」とは、『私財を擲って公共事業への奉仕』に終始したために家計を失ったからとされています(岩井文男「丹波地方に於ける基督教の受容(二)」、詳細は不明です)。



明田吉五郎翁之碑(須知本町)

紙数が尽きました。弟の重次郎については次回とします。(山下幾雄)